

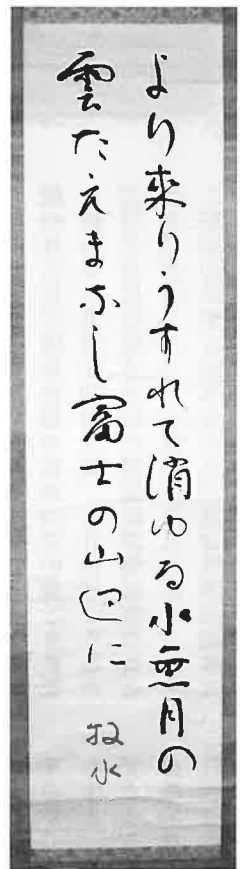
沼津市若山牧水記念館

第35号

2005.9.10

編集・発行 社団法人 沼津牧水会
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX 055-962-0424
http://web.thn.jp/bokusui/



より来りうすれて消ゆる水無月の
雲たえまなし富士の山辺に 牧水

水無月は古くは「みなつき」と清音で読んだ。「水の月」の意で、田に水を入れる月。陰暦の六月のことだが、この作品が作られたのは六月の四、五日頃で、詞書に「富士の麓大野原の秋は既に知りぬ、初夏の野原のながめいかならむとて六月初めまた其処に遊ぶ」と書いている。大正十一年の初夏のことである。

牧水が沼津に移住したのは大正九年八月十五日。狩野川に架かる黒瀬橋の近くで、当時は楊原村上香貫折坂と呼ばれたところに住んだ。その二ヵ月後の十月に御殿場から大野原を通って須山、そして十里木まで歩いている。その時に歌った富士の歌が「なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士が嶺の夕まぐれかな」で、「大野原の秋は既に知りぬ」の理由である。

大正十一年は正月を土肥で過ごし、三月に湯ヶ島に滞在して「山桜の歌」を詠んだ。その後、五月に箱根に杜鵑を聴きに行くなど、沼津周辺の小旅行を楽しみながら安定した心境で歌作りを楽しんでいた頃の歌である。

大野原は御殿場から裾野市須山に至る平原で、僅かな起伏

の中に薄が靡くまさに大野原であった。現在はその多くが自衛隊の演習地であり、また米軍の訓練も行われ、時に砲音があたりを揺るがし、戦車の轍が残る原野で、牧水が旅をした頃も、三島連隊の郊外演習地として使われていた。

掲示の歌はその大野原をゆくときに作られたもの。「より来たりうすれて消ゆる」と時の経過を追って変化する雲、その雲を浮かべて雄大に聳える富士。富士を詠んだ牧水の歌の中でも出色の作品である。

第十四歌集『山桜の歌』に収められた「大野原の初夏」の中の一首。前後の歌を紹介しておく。

穂に
麦畑のひとところ風の吹きたてば夕日は乱るその穂より

日にひと日富士をまともに仰ぎ来てこよひを泊る野の中
の村

富士が嶺の裾野のなぞへ照したる今宵の月は暈をかざせ

り
おらかな気分を湛えた歌群ではあろう。一首目の「麦畑」

は火山灰土で田にならぬ土地の作物として、麦が玉蜀黍とともに作られた。かつては稲の裏作としても作られた。麦畑という懐かしい名を思い起こすすがともなろうか。二首目の「野の中の村」の宿は裾野市須山の清水館である。牧水の泊まった部屋がまだ残っている。

(須永秀生)

「こころ」を見つめた牧水 栗木京子

『5メートルほどの果てしなさ』は今年の春に刊行された歌集である。作者の松木秀は北海道登別在住の三十代の男性。

明日という言葉は意味を持ちすぎて持たされすぎて今日の寂しさ

コンビニは安心できる絶対的に「ほんもの」

だけは置いてないから

おやこんなところにぼくが落ちていた机の

中の古い封筒

情報や物質は洪水のように溢れているのに、肝腎の心の拠りどころが見つけれない。そんな現代人の空虚感がこれらの歌には詠まれている。



歌集のあとがきで、松木は

わたしが短歌を始めたきっかけは、肉体と精神を同時に病み、名実ともにどん底にあった一九九七年に遡ります。(中略)自己が断片化する病(統合失調症)を病んでいた(現在も病んでいる)わたしの目には、短歌という形式が自己の同一性を保証してくれる形式に映ったのです。(中略)わたしにとって短歌は自己同一性を何とかして保持しようとする必死のあがきであり苦行でした。現在もそうです。

と書き記している。心にかかえる病を率直に表したこの文章がとても印象に残った。病名が付くかどうかは別に、ほとんどの人は「自分とはいったい何なんだろう」「自分の中にいくつもの違った自分があるような気がする」といった疑問や不安をいだいて生きていく。感受性の繊細な人や、成長の途中にあつて心身ともに揺れ動いている青年期の人は、とりわけこうした「自分とは何か?」という難題に深刻に悩むことが多いであろう。

松木の歌集を読みながら、私は牧水の短歌に

歌い込められた「われとは何か?」の問い掛けの深さを思い出していた。牧水は心を病んでいたわけではないが、痛々しいまでに自己を見つめ、自己の本質を突き詰めようとした人であったと思われる。

わがこころ 碧玉へきぎよくとなり日の下に曇りも帯

びず歎く時あり 『路上』

火の山のけむりのするゑにわがこころほのかに青き花とひらくも 同

気に入つた甕かめでもあらば、甕のかたちには、はやなりなまし、わがこころ 『みなかみ』

とりながすまじいものぞといつしんにつかまへてゐしこころなりけむ 『白梅集』

梅の花紙屑めきて枝に見ゆわれのこころの

このごろに似て 同

ふくみたる酒のほひのおのづから独り句へるわが心かも 『黒松』

自分自身の「こころ」を詠んだ歌を抄出してみた。二首目の「ほのかに青き花とひらくも」と表された心や、最後の歌のほろ酔い気分での「独り句へる」と捉えられた心はどちらもものびやかだが、他の歌に出てくる心はいずれも苦しい表情をまとうている。暗く苦しげな心から目をそらすことなく、言葉で心にかたちを与えようとする。そこに牧水の誠実さを感じることが出来る。そして歎いたり焦ったりしながらも自分の心をどうにかして表現しようとする過程で、牧水は心を客観的に見つめることのできる余裕

を少しずつ取り戻していったことがうかがえる。四首目はとりわけ印象深い歌。観念的に詠まれているが、作者である牧水の気持ちがいしひしと伝わってくる。

もの思へばさはの螢もわが身よりあくがれ
出づる玉かとぞ見る 和泉式部『後拾遺集』
と詠まれたように、古典和歌においても心(和泉式部の歌では「玉」が魂すなわち心にあたる)は身体からふわふわと遊離して漂うものと捉えられていた。牧水の歌では「いつしんにつかまへてゐしころ」と過去形で表していることから、必死で閉じ込めていた心が結局は逃げていつてしまった喪失感を表しているものと思われる。すべて平がなで表記されたつぶやくような一首の背後から、からつぽになつてしまった虚しさが広がってくる。ただしその虚しさは、喪失を乗り越えようとするゼロからのスタートへの道のりであった、と考えたい気がする。

白雲のいざよふ秋の峰をあふぐちひさなる
かな旅人どもは 『独り歌へる』
消えやらぬ大あめつちの生物のひとつのわれに秋かぜぞ吹く 同
わがほどのちひさきものかなしみの消えむとせぜ天地にあり 同
血騒るとだにの児はだに這ふにや似む夕日の山をわが攀ぢのぼる 『みなかみ』
ここに引用した四首の歌には大自然の中に身を置いたときの「われ」の小ささが詠まれてい

る。自己と向き合ったときの牧水の歌の魅力の一つとして、これらの歌に見られるようにささやかなわれの存在をじつに虚心に表現している点があげられる。

一首目は信州軽井沢に遊んだ折の歌。「旅人どもは」と複数形で表して、個人を越えた人間そのものの小ささへと視点を広げたところに歌の奥行が生まれている。二首目、三首目も悠久の宇宙や永遠の時間の中の人のいのちの小ささを



牧水全歌集『海の声』『独り歌へる』『別離』『路上』『死か芸術か』『みなかみ』『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『白梅集』『さびしき樹木』『渓谷集』『くろ土』『山桜の歌』『黒松』

に目を向けている。はかない一粒のいのちではあるけれど、またかけがえない愛しいいのちでもある。消えやらぬ大あめつちの生物のひとつの「わがほどのちひさきものかなしみの」という「の」の繰り返しを生かした歌のしらべが美しく、天地の間に風に吹かれて立ついのちの声を、読む者に伝えてくる。

四首目は個性的な歌である。夕日に照らされた山を攀じ登ってゆく自分を、肌這うダニにたとえている。一見するとユーモラスな歌とも解釈できるが、実際はこの一首は深刻な孤独感を背景にしている。明治四十五年七月、父危篤の電報を受け取った牧水は急いで東京から故郷宮崎に向かう。帰り着いた故郷では父の病状がそれほど重くなく安堵するものの、彼を待ち受けていたのは親族からの激しい罵倒と村人たちの冷たい視線であった。大学を卒業しても定職に就かず、長男でありながら実家のことをかえりぬままだった牧水に対して、いつせいに非難の矢が飛んでくる。姉や母からも罵られる彼のいたたまれなさはいかばかりのものだっただろう。そんな苦しみを紛らわすかのように、ひとり黙々と夕日の山に登ってゆく。みずから「血騒るとだにの児」にたとえた牧水の心には自嘲の笑いさえ満ちていたかもしれない。しかし哀れな自分の姿を滑稽味をまじえて描写することによって、かろうじて彼は心の平衡を保とうとしているようにも思われる。



牧水全15歌集

だんだんからだちぢまり大ぞらの星も窓より降り来るとし 『白梅集』

遠くよりさやさや雨のあゆみ来て過ぎゆく夜半を寝ざめてありけり 『独り歌へる』
旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に 『死か芸術か』

胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤とんぼ等が来てものをいふ 『路上』

この梅はものをかもしふ居向かひて久しくみればいよよかはゆき 『山桜の歌』

同じく自然の中に身を置いていたる歌だが、ここに抄出した五首は前の五首に比べるとずっと明るい。

一首目。最初から小さい存在なのではなく、「だ

んだんからだちぢまり」と動きのある言い回しをしているのが面白い。星屑のひとつになった牧水は、まるでこれから銀河への旅に出発するかのようである。

二首目、三首目の雨の捉え方も牧水ならではの味わいであろう。単なる擬人法の枠を越えたりアリティがある。遠くの方から次第に近づいてくる雨の気配は、やがて寢床の中の牧水のからだをすっぽり包み込み、彼を雨色に染めたまま去ってゆく。もちろん牧水は家の中で寝ているのだから、雨に濡れているわけではない。雨音と空気の湿り具合から「雨のあゆみ」を感じ取っているのである。「旅人のからだもいつか海となり」の感覚もそれと同様だろう。雨が降ることによって、空と地と海とが雨を介して一つの「水の世界」をかたちづくる。雨によって結ばれた水の空間に身を置いていると、雨に濡れることはすなわち海そのものに同化してしまうこと、そう感じられてもおかしくはない。ここでも牧水は「われ」に全く固執しようとはしていない。仏教で言う「放下」の境地にも通じるような自在な精神の在り様がうかがえる。

赤とんぼや梅の花がしゃべりかけてくる四首目や五首目の歌は文句なく楽しい。『路上』は二十代後半、「山桜の歌」は三十代後半の歌集だが、少年のままの無垢な感性が歌からきらきらと耀き出してくる。五首目の「いよよかはゆき」が端的に示しているように、対象への濃密な愛

惜があればこそ、昆虫や花々と交信することができたのだろう。

こうして牧水の詠んだ「こころ」の歌、「いのち」の歌、「われ」の歌を読み直してみると、いっしょに心が癒されてくるのを感じる。私自身も含めて現代人はさまざまストレスに晒され、心身のバランスを崩しがちである。そんなとき牧水の数々の作品(今回の拙稿では言及しなかったが短歌のみならず紀行文等も含めて)を静かに読み返してみたいと思う。そして、悩みをかかえている人たちにも勧めたいと思う。牧水は日の当たる場所を能天気歩いてきた人物ではない。人一倍傷付き、悲しみ、絶望し、そのぶん人一倍純粋に生きた人だった。そんな牧水の人生をあらためて思い返している。



【筆者プロフィール】

一九五四年
名古屋市長
令京大
理学部在
学中に角川
短歌賞次席
入選。九五
年歌集『綺

羅』で河野愛子賞、二〇〇二年雑誌『短歌研究』掲載の「北限」三〇首で第三八回短歌研究賞受賞。『夏のうしろ』で第八回若山牧水賞および読売文学賞受賞。歌集に『水惑星』『中庭(パティオ)』『万葉の月』。歌書に『短歌を楽しむ』。『塔』選者。岐阜県在住。今春の第一七回「雑の歌会」の講師。